



Title	彙報
Author(s)	
Citation	懷徳. 1924, 1, p. 46-54
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88694
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

東區東雲町三丁目二二八

鐵工業

北區綱島町三八

東區本町四丁目相愛女學校內

西區岩崎町三ノ二五

南區南炭屋町二五

泉北郡久世村字小阪三一

大阪府三島郡吹田町一八四

畫家

市外鶴橋町字天王寺五八二八

官吏

東成郡住吉村一二七七

大阪高等學校書記

北區上福島中二丁目三三一

森口定藏

北井芳郎

池崎至誠

近藤幸夫

宮崎發

仲田博一

阿部剛一

電話南三九七〇番

三輪時雄

城野雄介

藤塚誠二

彙

報

懷德堂一覽

第一 沿革略

懷德堂は享保九年五月中井甕菴先生大阪の商人中村睦蜂(三星屋武右衛門)、富永芳春(道明寺屋吉右衛門)、長崎克之(舟橋屋四郎左衛門)、吉田盈枝(備前屋吉兵衛)、山中宗古(鴻池又四郎)の五有志と胥謀り諸同志を糾合し尼崎町一丁目(東區今橋四丁目北側日本生命保險會社)は其の舊址に當れり)に講舍を建て懷德堂と名け三宅石菴先生を聘し學を講せしに窺まる。同十一年七月幕府の允許を得て更に規模を擴張し八月に至り増築工竣る是に於て大阪學問所たる懷德堂の基礎確立す石菴先生學主となり十月五日を以て始めて講席を開き五井蘭洲先生聘せられて助教となり日講を主る並河誠所、井上赤水二先生等講を助く甕菴先生は學問所預人となり専ら學校の事を管理せしが後亦講說に従事す享保十五年(七月十六日)石菴先生歿して後甕菴先生學主とな



り學問所預人を兼ね寶曆元年堂舎を改築す同八年（六月十七日）鸞菴先生歿し石菴先生の子春樓先生學主となり鸞菴先生の子竹山先生預り人となる、是より先き享保十二年蘭洲先生大阪を去りて東遊せしが元文四年歸阪し寛保三年より堂内に住し、教授の事に當ること二十年寶曆十二年（三月十七日）歿す。天明二年（十月九日）春樓先生歿し竹山先生學主を兼ね、是に於て學風大に振ふ、寛政四年（五月十六日）大阪大火の爲めに全部類焼せしかば幕府に請ふて再建を圖り同七年七月普請手當として金三百兩を賜ふ同年八月起工翌年七月竣工す、同九年竹山先生退隱して學問所預り人を其子蕉園先生に譲り自ら學主たること故の如し、享和三年（八月四日）蕉園先生早世し翌文化元年（二月五日）竹山先生歿す遺言して學主及び教授の任を弟履軒先生に囑す履軒先生文化十四年（二月十五日）歿し竹山先生の子碩果先生預り人を以て教授を兼ね天保十一年（三月十四日）歿す其姪並河寒泉先生教授となり履軒先生の孫桐園先生預り人となる明治元年山階宮晃親王臺臨あらせらる明治二年學制改革せらるゝと共に學徒離散し竟に廢學す享保九年創學より此に至る實に百四

十六年なり其後四十一年を経て明治四十三年一月十九日大阪人文會に於て『懷德堂師儒諸先生の爲に公祭を舉行すべし』との議を決し同年九月男爵住友吉左衛門君を會頭に小山健三君を副會頭に推し懷德堂記念會成立す四十四年十月五日懷德堂記念祭を執行し尙併せて記念刊行學術講演遺物展覽の三事を行ふ翌四十五年三月剩餘金處分協議會を開き『剩餘金を基本財産とし本會と同一の目的の下に更に法人組織の懷德堂記念會を創立し有終の美を濟さん』の議を決し大正二年六月永田仁助君西村時彦君今井貫一君水落庄兵衛君廣岡惠三君を理事に選び更に永田仁助君を理事長に推し法人設立を出願し同年八月財團法人懷德堂記念會設立を許可せられる此事畏くも天聽に達し同三年三月金貳百圓を下賜せらる同四年六月大阪府より講堂敷地として府立大阪博物館の西北隅なる府有地三百六十一坪の無償使用の許可を得遂に同年十月地鎮祭を執行し翌年九月工を終り十月十五日開堂式を舉行す十一月四日定期學術講演會第一回を開き爾來毎月二回開會となす十二月五日廣島高等師範學校教授文學士松山直藏君を聘して懷德堂授とす六年一月六日會計規則講義規則を定む理事西村時彦君に講師を囑託す一月二十七日定日講義開講

式を擧げ松山教授大學首章を講ず爾來每週二回講義を行ふ同年四月素讀科を設け波多野七藏君に教師を囑託す五月一日より教授を開始す京都帝國大學助教吉澤義則君に講師を囑託し五月七日より萬葉集抄講義を開始す同年十月十四日記念祭恒典を行ふ七年十月五日記念祭恒典を行ふ八年二月吉澤義則君講師を辭す第三高等學校教授林森太郎君に講師を囑託す三月文學士武内義雄君に講師を囑託す四月七日通俗講演規定を定む六月二十一日第一回通俗講演を開く九月より日曜朝講を開始し定日講義回數を増加して每週三回となす十月五日記念祭恒典を行ふ九年十月十日記念祭恒典を行ひ兼ねて本堂先師儒諸先生の贈位を報告す十月十二日教育勅語謄本を下附せらる三十日勅育勅語煥發三十年に相當するを以て勅語捧讀式を舉行し西村講師勅語を謹講す十一月一日明治神宮鎮座祭に相當するを以て遙拜式を舉行し松山教授明治天皇の盛徳に就きて講演す十年一月より每週一回特科講義を開始す同年十月二日記念祭恒典を行ふ十一年十月八日午前記念祭恒典を行ひ午後孔子祭を行ふ十二年四月文學士財津愛象同稻束猛二君に講師を囑託す同月より每週一回文科講義を開始す

特科講義の名稱を廢し定日講義とす同年七月二十七日本會事業の狀況天聽に達し金參阡圓を下賜せらる同年十一月十日畏くも國民精神作興に關する大詔煥發せられたるを以て同月十八日松山教授「大詔を拜し奉りて」と題し詔書に就きて謹講す同月二十八日本會講師吉田銳雄君文部省在外研究員を命ぜられ支那に出張す。

第二 財團法人懷德堂記念會趣旨

維新前に於ける我が大阪唯一の學校なりし懷德堂は中井菴菴先生が大阪の商人なる中村睦峰富永芳春長崎克之吉田盈枝山中宗古の五有志と謀りて諸同志を糾合し三宅石菴先生を聘して尼ヶ崎町一丁目北側に創立せし者にして時に享保九年なり同十一年幕府の官許を得てより大阪學問所とも稱し石菴先生歿後は菴菴先生學主となり五井蘭洲先生教鞭を執る者前後二十年尋ぎて菴菴の子竹山（懷德堂學主）履軒（水哉館塾主）二先生崛起してより大阪の文學雄を海内に稱し子孫相繼ぎて業を世にし以て維新の際に至る、世態一變して學校も亦廢したりしが創立より廢學に至るまで絃誦の聲を絶たざるもの實に百四十餘年なり竹山履軒二先生の門人材輩出して海内に分布し以て一世の文化を振興せり斯

る大儒を我が大阪に出だし、は豊太閤の大阪城にも譲らざる偉蹟と謂ふべし然れども我々後人の最も深く懷德堂に感銘する所以の者は大阪唯一の學校として大阪の文教を主るもの久しく大阪人を教育して其の品性を養ひ其風俗を正し以て世道人心を維持せしに在り我が大阪は古より商業を以て著はれ國運振張の今日に在りて亦商工業の中心と稱せらるゝ所以の者は古來養成したる大阪人の品性と良習慣とに起因すべく品性と良習慣とは並に教化の致す所にして懷德堂百四十餘年間の文教に負ふ所の者莫大なり君父師は之を三恩と言ふ報本反始は人の道なり大阪人たるもの今日の盛を致し、所以を思ふて而して祖先の受けたる教化の恩を銘し以て將來の德育に留心せざる可らず顧ふに天地の在らんに限り人類幸福の基礎は道徳に在り國家の隆昌も社會の平和も家庭の安樂も皆此に根底す而して商業上道徳の尙ぶ可きは固より言を待たず古來の教化の効能く盛を今日に致せる大阪が亦能く繁榮を將來に獲んと欲せば一たび其頭を回して源に溯り故を温ねんことを要す則ち我が大阪人が今古に俯仰して自ら省み自ら戒むるに適當なるは懷德堂の歴史に若くなし是れ曩に懷德堂記

念會を起し明治四十四年十月五日（十月五日は幕府の官許を得て講を開きたる記念日なり）を卜し懷德堂師儒諸先生の靈を祭り且つ碩學を聘して講演を開き遺書を刊行し遺墨を展覽し以て一は百四十餘年間教化の恩に報い一は世道人心の振興に資するところありし所以なり厥後同會發起人及び役員相會し同會の剩餘金を以て基本資産とし更に同一の趣旨の下に懷德堂記念會を興し有終の美を濟さんことを決議せらる是れ這般本會の設立を見たる所以にして即ち此れを財團法人の組織と爲し以て本會の趣旨を永遠に遂行せんことを期す因て此に其成立の來歴を宣明す。

第四 懷德堂學年曆

一月一日	新	年	一月三日	元	始
同 十日	冬季休業終		同 十一日	第一期講義始	
二月十一日	紀	元	節	春分日	春季皇靈祭
三月卅二日	第一期講義終		四月一日	春季休業始	
四月三日	神武天皇祭		同 十日	春季休業終	
四月十二日	第二期講義始		六月卅日	第二期講義終	
七月一日	夏季休業始		七月卅日	明治天皇祭	
八月卅二日	天	長	節	八月卅二日	夏季休業終

九月一日 第三期講義始 秋分日 秋季皇靈祭

十月五日 本堂記念日 十月七日 神嘗祭

十月卅一日 天長節祝日 十二月廿三日 新嘗祭

十二月廿日 第三期講義終 十二月廿一日 冬季休業始

第五 懷德堂諸規則

一、懷德堂講義規則

第一條 本堂は徳性の涵養學術の研究を目的とし左の講義講演をなす

第二條 本堂の講義を文科講義定日講義定期講演の三種とす

第三條 文科講義定日講義は一ケ年を三期に分ち一月十一日より三月末日までを第一期とし四月十一日より六月末日までを第二期とし九月一日より十二月二十日までを第三期とす

文科講義定日講義の課程及び教科書は別に之を定む

第四條 文科講義定日講義聽講生たらんとする者は聽講志望書（用紙は本堂に於て交付す）を差出さるべし但二十歳未満のものは父兄若くは長上の連署を要す但文科講義聽講生たらんとす

第五條

文科講義定日講義聽講生たらんとする者は聽講志望書（用紙は本堂に於て交付す）を差出さるべし但二十歳未満のものは父兄若くは長上の連署を要す但文科講義聽講生たらんとす

第六條

第七條

るものは中等學校卒業程度以上の學力あるものに限る。尙ほ隨時聽講生たることを得定期講演は學術講演及び通俗講演の二種とす定期學術講演は七八兩月を除き毎週土曜日、通俗講演は毎週一回若くは二回之を公開す其講師及講義課目は豫め之を公示す

第八條

定期講演聽講者は聽講者名簿に住所職業氏名を自署し若くは住所職業を附記せる名刺を差出さるべし

第九條

本堂の定期講演及通俗講演の聽講は無料とし定日講義聽講生には堂費として毎期の始に於て一ケ月貳拾錢の割合を以て納入せしむ文科講義聽講生は授業料として毎月貳圓を納入せしむ

第十條

本堂に於て特殊の研究をなさんとする者の爲に特別講義をなし一定の期間臨時講演を開くことあるべし其規程は臨時之を定む

二、素讀科規則

一、素讀科は孝經四書全部を課し一箇年を以て修了するものとす

一、素讀生は滿十二年以上十八年以下のものに限る

一、素讀生たらんとする者は父兄又は後見人連署の志望書を差出すべし（用紙は本堂に於て交付す）

一、素讀料は毎週月木土曜日の三回午後一時より同六時までの間に於て來堂順に之を課す

一、素讀生は毎月十日まで月謝金壹圓を納むべし

一、素讀科修了者には修業證書を授與す

三、懷德堂通俗講演規定

第一條 通俗講演は一般市民の常識を養ひ品性を向上せしむるを以て目的とす

第二條 通俗講演は本會講堂及市内適宜の場所に於て之を行ふ

第三條 本事業遂行の爲に特に理事長より委囑したる常任委員及臨時委員を設く

第四條 常任委員は講師の依囑會場の借用案内狀及聽講券の印刷配布其他講演會開催に關し重要な計畫準備の事務に當るものとす

第五條 臨時委員は會場の整理聽講者の勧誘其他講演會開催當日に於る一切の事務に當るものとす

大正十三年中の通俗講演は科學に關する智識を普及するを目的とし京都帝國大學理工醫諸學部の教授を聘して左記講演を行ふ（聽講隨意）
追て日時は其の都度大阪朝日、大阪毎日兩新聞紙上に廣告すべし

一月（二十日午後二時）

地殻の釣り合ひ及び變動 理學博士松山基範君

二月（十七日午後二時）

人生と植物 理學博士郡場寬君

三月（九日午後二時）

建築の形の變遷 工學博士武田吾一君

四月（二十日午後二時）

空中に於ける電氣の活動 工學士鳥養利三郎君

五月（十八日午後二時）

生物の生長と其成分との關係 理學博士小松茂君

六月（十五日午後二時）

和室の衛生學的研究 醫學博士戸田正三君

九月（廿一日午後二時）

未定 理學博士吉田卯三郎君

十月（十九日午後二時）

未定 醫學博士 藤浪 鑑君

十一月（十六日午後二時）

未定 理學博士 川村多實二君

十二月（十四日午後二時）

未定 理學博士 新城新藏君

（七、八兩月は夏季休講）

第六 定日講義目的並課目

一、目的

定日講義は聖經賢傳及び本邦古典を講じ德性を涵養し我國民性及び國民道德の淵源を究むるに資するを以て目的とす

二、課目

現時講義中のもの

每週月曜日（自午後七時至午後九時）

韓非子 稻束講師 詩經 財津講師

每週水曜日（自午後七時至午後九時）

先哲叢談 財津講師 理學宗傳 松山教授

每週木曜日（自午後七時至午後九時）

新古今集 林講師 周易程傳 松山教授

每週日曜日（自午前九時至午前十時）

論語 松山教授

三、講義既了課目

論語、禮記纂言抄、書經、宋名臣言行錄抄、中庸、大學、孟子、大學衍義、古今學變、輯軒語、近思錄（松山教授）

經子簡編、孟子、詩經（西村講師）

萬葉集抄、記紀歌抄（吉澤講師）

祝詞宣命抄、萬葉集選、古事記抄、古今集（林講師）

諸子概説、荀子、曾文正公家訓（武内講師）

楚辭（財津講師）

第七 文科講義目的並課目

一、目的

文科講義は東西の名著を講じ文科に屬する學術の研究に資するを以て目的とし東西兩洋を兼修せしむるを主義とす

二、課目

カント道德哲學の基礎（藤井講師）朱子書節要（松山教授）

隔週金曜日（自午後六時至同九時）

レーベン、ウント、ビルヅング（藤代講師）杜詩偶評

(鈴木講師)

隔週金曜日(同前)

藤井講師は近く海外學事視察の途に上らるゝを以て來九月よりは京都帝國大學文學部教授朝永博士にカントの『プロレゴメナ』の講義を請ふことゝなれり

講義既了課目

九善獨逸語叢書第二卷人物評論(藤代講師)

第八 定期講演目的並題目

一、目的

定期講演は高等なる學術的智識を普及し文化の向上學術の研究に資するを以て目的とす

二、現行講演題目

日本語の由來 京都帝國大學文學部 新 村 出
有史以前の日本 同 文藝博士 濱 田 耕 作

右講演は何れも六月を以て終了し來る九月よりは三浦文學博士(演題未定)高瀬文學博士の周易概説の講演ある豫定なり

三、講義既了題目

孟子概説(十三講) 京都帝國大學文學部 狩 野 直 喜
國 史 新 話(十三講) 同 三 浦 周 行

老子評論(十講)

同

高瀬武次郎

支那通説(八講)

同

桑原隲藏

近世の日本(十一講)

同

内田銀藏

支那に於ける史の起原(十講)

同

内藤虎次郎

『カント』の倫理學(十四講)

同

藤井健治郎

現代に映じる西洋古代文明の片影(六講)

同 坂口 昂

青年の心理及其教育(十四講)

同

野上俊夫

國史上に於ける社會問題(十六講)

同 三浦 周 行

『カント』の前と後(十三講)

同

朝永三十郎

日本に於ける信仰と美術(十六講)

同

澤村 專 太郎

京都帝國大學文學部助教授文學士

朝鮮の文化(十三講)

同

今 西 龍

印度の文化と其潮流(十三講)

同

松本文三郎

京都帝國大學文學部教授文學博士

近世支那概観(十五講)

同

矢野 仁 一

陵象山の學説(十講)

同

高瀬武次郎

世界戦争の話(九講)

同

小 川 琢 治

京都帝國大學文學部教授理學博士

日支文化關係(九講)

同

小 川 琢 治

京都帝國大學文學部教授文學博士 内藤虎次郎

西洋の藝術及藝術論(十一講) 同 深田 康算
古代印度に於ける美術に就て(十三講)

道徳思想の發達(十四講) 同 神 亮三郎
日本文化の過程(十九講) 同 野 上 俊 夫

現代教育思潮批判(六講) 同 原 勝 郎
支那史上の偉人(六講) 同 小 西 重 直

論 語 概 説(十講) 同 桑 原 隲 藏
日本民族概説(十三講) 同 狩 野 直 喜

國 字 の 話(七講) 同 喜 田 貞 吉
同 吉 澤 義 則

大正十三年七月二十日 印刷
大正十三年七月二十五日 發行

【非賣品】

大坂市西區八幡屋町九七

發行兼 編輯人 小 沼 量 平

大坂府豊能郡池田町三二三七ノ一

印刷人 平 野 善 之 助

大坂府豊能郡池田町三二三七ノ一

印刷所 太陽日報社印刷部



大坂市東區豊後町懷徳堂記念會内
發行所 懷徳堂友會

電話東三五五番